黒の少女と観戦日記

暁　すう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の少女と観戦日記

【Ｎコード】

Ｎ８４９２Ｘ

【作者名】

暁　すう

【あらすじ】

将来の夢はない。恋もしていないし、なんの委員会にも入ってない。取り柄といえば、足が速いことぐらい。そんな無気力女子高生が、とあるきっかけで見知らぬ世界へ飛ばされて。訳もわからず混乱する七夕は、元の世界へと帰る方法を探し始める。しかし、その世界で起こっている戦争を見て・・・

００　プロローグ

巷でいうところのＪＫになって、一年が過ぎた。

心地良い陽気っちゃあ心地よい陽気ではあるのだが、何分風が強くていちいち私に召されようとしてくる髪がうざったい。

二年になって数日が経過して、私は大分クラスになじみ始めてきた。新しい友達もできたし、先生はノリが良い人で、今年はいろいろと安心できそうだ。

クラスでつまらない思いをするのは、嫌だしね。

部活は充実している。

私は陸上部なのだが、去年の秋に、短距離のレギュラーに入ることができた。後輩は可愛い。もうめっちゃ可愛い。毎日撫ですぎてうざがられてるけど撫でるのをやめたら私の先輩らしさが見当たらなくなりそうだからやめない。残念だったね、カミナちゃん。

言い過ぎかもしれないけど、順風満帆…って感じだ。

私のイメージでは、中学と高校は二年が一番楽しいと勝手に思ってる。

だから、今年は最高の一年になる！きっと！

…まあ根拠のない思い込みはいい方向に働くだろうと決めつけてやろう。

「まっぴんくやなぁー。」

地面でくっるくる回ってるピンクの花弁を見ながら呟く。足元のさくらちゃんたちは大半がリストラされたリーマンのように元気をなくしてアスファルトに寝そべっていた。
会社の方を見上げてみると、有能な黄緑がオフィスを占領している。残り少ない桃色は現在進行形で追いやられてふらふらと虚空を彷徨っていた。

儚いなぁ、と思う。
生まれ変わっても、桜にはなりたくない。そもそも私はピンクという色があんまり好きじゃない。
平和すぎる、色って感じがして。
私は常に、何かに恐怖を感じて生きているから。
油断を誘うその色は———やっぱり好きになれなかった。

んー…、自己紹介とか…した方が良いよね、やっぱり。
なんか一人で自分のことをひたすら話すって、気恥ずかしいけど。
でも、花子とか呼ばれたら嫌だし。

名前は、弓塚七夕（なゆう）。由来は多分わかると思うけど、誕生日が七夕だから。『たなばた』って名前にされなくて良かったーって素直に喜べないところに両親の才能を感じるね。なんだよ、なゆうって。
上に兄がいて、四人家族。
特技っていうか、趣味は走ることかな。

兄貴には男みたいだとよく言われるし、お母さんには口が悪いと怒られる。それだけで私の性格はわかるというものだろう。

まぁ、そんくらい。特別目立ったところはない。

幽霊とは話せないし、超能力もつかえない。ふっつーの。高校二年生女子。彼氏は中三の時以来いない。

まぁあれは血迷った結果だけど。

特別なことにあこがれを持つ時期は通り過ぎた。

普通が一番。今なら分かる。

将来の夢も持ってないつまらん奴だけど、それでいいなぁと思っている。

それに、私は一生特別な体験をすることはないだろうし。

…と、まぁそう思ってたんだよ。この時まではさ。

01　日常

4月13日

「なゆー。」
昼休み、私に話しかけてきたのは、友達の吹上れらだった。こいつも私に負けず劣らず変な名前。
ちなみに結構可愛い。ちっちゃくて。

「何？」
購買で買ってきたチュロスをかじりながら答える。
「昨日さぁ、めっちゃ可愛いレギンス売っててぇ。欲しいの二足あったんだけど…金なくてさぁ。ピンクと黒ですっごい迷ったんだよね～。」
「どっちにしたの？」迷いなく黒だろ。
「ピンク。」
「乙女だなぁ。」
そりゃ、れらだったら似合うだろうさ。

「れらねー、黒なゆにあげようと思ったんだけどー。」
「金なかったんだろ？今聞いたよ。」
「あははー。それもあるんだけどねー。
そういえばなゆってスカートとかあんま履かないなー、と思って。」
やめたんだよね、と微笑むれら。
微笑むれらって新らしい語尾みたいだな。

「履いてんじゃん。」
現在進行形で。

「制服じゃん！違くて、私服で！」
「あー…。」
スカート…持ってたっけ？兄貴にきもいって言われてから履いてない気がするなぁ。今思い出してもムカつく奴だよね、兄貴って。
スカートは、走る時にめくれるし、落ち着かない。私が帰りの電車に駆け込みしてる時にどんだけハゲおやじを敵に回していることか。ジャージなめんな。

「その下ジャーもどうかと思うよ？」
「何で。」
「女の子らしくない。」
「よく言われる。」
「もったいない。」
「それは言われないなぁ。」
下ジャーあったかいんだけどねえ。落ち着くし。
むう、と膨れるれらは可愛いとは思うけど私の心を痛ませるにはまだ足りない。

れらは、可愛い顔してるくせにご飯を食べるのがめっちゃ早かったりする。
だから既に、くっつけている机の上にれらの弁当箱は置かれていない。私も体育会系なので早い方なのだが、れらはそれ以上。まぁれらも一応運動部だけど。
なんだっけ？バレー部？背ぇちっちゃいのにえらいね。

「れらー、保健委員特別会議だってさー。」
教室の後ろのドアから、にゅっと背の高い少女が入って来た。
「お、なゆ良いの食べてんじゃん。一口ちょーだい。」
隣のクラスの山田巡（めぐる）。モデルばりの美少女である。性格もさっぱり

していて、同じクラスにはなったことないけど気が合う。同じ陸上部っていうのもあるか。巡は長距離だからあんま接触はないけど。

巡は私のチュロスを、一口で全て食べた。半分くらい残ってたのに。

「一口に気を遣わない奴はがめつい奴だと相場は決まっている。」

「うま。あたしもチュロス買って来よう。」

「私に一本。」

「覚えてたらね。」

「おめえ買ってくる気ねえだろ。」

あははと、憎たらしい笑みを浮かべる巡。れらを見習え。こいつはこんなにも可愛いぞ。わしゃわしゃ。

「わぁお。なゆに撫でられたぁ。」

「んじゃ、いってらっしゃいな。」

「はあい！」

元気なお返事よく出来ました。

「私には？」

「じゃあね。」

「地味に傷つく。」

巡は苦笑してから「分かったよ、チュロスね」と言って、れらを連れて出て行った。

はぁ…私のチュロス…。

「せんぱーい！」

「不合格。」

「何がっすか。」

「せんぱーい（→）じゃなくて、せんぱーい（←）の方が良い。」

「なんか気持ち悪いですよ。」

「よう言われる。」

放課後の部活。小走りで駆け寄ってきたちっさい上南（カミナ）を正面から抱きしめてうざがられる。
いつものことです。
いやぁ、しかし可愛いなぁ。こいつにせんぱーい（←）なんて呼ばれたら返事しちゃうよ。

「何、どうした。」
「いや、今日のメニューを…ちょ、撫でないで下さい！」
「お前シャンプー何使ってんの。」
香り過ぎじゃね？
「いや…ちょ、なゆ先輩、うざいっす。」
「知ってるっす。」
「はい、メニューです。」
カミナが私の手を払いながら今日の練習内容が書かれたルーズリーフを渡してくる。いやぁ可愛いなぁ。ひょっとしたらハムスターよりも可愛いぞ。ハムスターとか実物見たことないけど。
ジャージの裾を直しながら、カミナはむすっとして「早く練習はじめますよ！」とかごろ寝している猫のくしゃみ並の可愛さを発揮してきた。可愛いわぁ。陸部入って良かったわぁ。
れらとは違う可愛さがあるね。まあジャンルが違うから比べたりはできないけど。

んで、部活動をいつものように終えて、途中まで友達と普通に帰宅を果たした。
「ただいまー。」
「おかえりー。」
兄貴が玄関に座ってた。
「…何してんの。」

「気分。」
…変な人。

そういえば巡、チュロス持ってこなかったな…あの野郎。

「兄貴、何やってんの。」
「何も。」
後ろをむいて、背を丸める兄貴の手元を覗きこむ。
「…エロ本は玄関で読むもんじゃねえぞ？」
「ちげえよ！」
「…ねこ？」
よく見ると、兄貴の腕の中には茶色いぶちのネコが抱かれていた。
「こねこじゃん。拾ったん？」
兄貴はバレター！みたいな顔で答えない。笑うけど馬鹿にしないって。
「…庭にいた。」
「ふうん？」
可愛いなぁ。こねことか。カミナと同じくらい可愛いじゃん。てか隠さなくてもいいのに。
しかし、あの兄貴が猫とかうける。
「だから見せたくなかったのに。」
私が声を押し殺しながら笑いまくる姿を悔しそうに見つめる兄貴がなんだか可愛らしく見えた。

さて、トイレ。
先程から密かに催していた。
私は学校のトイレが死ぬほど嫌いだから、家に帰るまでトイレには行かない。
学校のトイレだけじゃなくて、家のトイレ以外は全部無理。
潔癖症とか、そういうんじゃないんだけど…。まぁこの話は少し下

品なので置いとこう。

トイレは、使用中だった。

「……。」

小さく舌打ちして、

「誰系？」

と呼びかける。

「お母さん系ー！ごめんね、出るわ。」

また雑誌読んでたろ、こいつ。自室にすんなよ。

扉が重々しい音をたてる。

私は少し避けてお母さんが出てくるのを待つ。

「相変わらずたてつけ悪いわねー。」

お母さんはそう言いながら、雑誌を片手に出てきた。

「直さないとね。」

私は言って、入れ替わりに狭い空間に閉じ込められに行った。

閉じにくい扉を閉じて、鍵をかけようとした瞬間。

……は？

バッキィ…いってもうた。

ドアノブが、ポッキリ折れて、役目をなし終えた。

私を残して。

おい。おいおい。待てや。

え？出れなくね？これ。

捻んないと出れないんだよ？ウチのトイレ。

ぶ…無様だ。

「ちょお、ちょお誰か！」
…返事はない。

え、何で？

壁に耳を当ててみると、
『わっわっ！母ちゃんヤバい！漏らした漏らした！』
『あらあら…雑巾雑巾…。』
こ…この野郎…ねこちゃんめ…！

ひとまず騒動が収まるまで待っていようかと、溜息をついた瞬間。

トイレの水が流れた。

いや、水洗トイレだから水は流れるんだけど…このウチのトイレの水洗は手動で…。
私はその働きになんの助力もしていない。
気持ち悪！

とか、思っていたら。
いきなり風が吹いてきて…。え、風？
てゆうか…。

え、どこ此処？

０２　非日常のスタートダッシュ（前書き）

残酷表現あります。苦手な方は注意してください。

02　非日常のスタートダッシュ

そこは、見覚えのない更地だった。

当然、じゃあとりあえずランニングから始めるかーとか思う筈もなく。

どこだよ、ここは…。

言っておくが、私がいたのはトイレだ。家の。

しかしここは明らかに室内じゃない。つーか私靴下なんだけども。

汚れてしまうではないか。

「こういう時はカミナちゃんにちょっかい出したいね。」

そうすると落ち着くんだよ。

カミナは高校に入って初めてできた後輩だから、特に可愛い。いや、部員が一人しかいないとかじゃなくて。カミナは陸上の半推薦で入ったようなものだから、他の子と違って春休みにはもう部活に参加してた。

そんなことを考えながらぼーっとしていた。

何が出来る訳でもないし。突っ立ってるほかない。と、何となくナマケモノに憧れを抱き始めながらどうでもいい言い訳を心内環境に挿入する。

そこに。

「いたぞ！【一角獣（ユニコーン）】だ！」

声が聞こえた。
振り返ると、そこには五つの人影。
暗くて姿はうっすらとしか見えないが、うち二つは大きさからして子供だろうか。
それぞれ何か長い棒のようなものを抱えている大人（？）三人と、子供二人は数歩距離を置いて対峙しているようだ。
なんだろう、と目を凝らして見てみる。
３０メートルは離れている５人を、しまうまの群れを観察するライオンのように見据える。
争っているように見える。

そんな風に思っていたら。

大人…体格からして男だろうか。男が、一人ずいっと前にでて、二人に近付いた。
そして、手にしていた棒を掲げる。
そこで気付く。
（刃…？！）
棒の先端には薄明かりに鈍い光を放つ刃が存在感を自慢していた。
そしてそのままそれを———

振り下ろす。

「っ！？」
「きゃぁあああああ！」
な…！？

何が、

何が、何が、

何が、　　何が、

何が、

何が、起きてるの…？今

子供の一人が、糸が切れたマリオネットのように。
意図が切れたマリオネットのように。
頭を垂れる。それから、もう一人に支えられて、なんとか重力に逆らう。

しかし、あれはもう死んでる。それは私でも分かる。
「ま…ってよ…！」
嘘でしょ。意味わかんない。私はそこまで、状況把握が上手くない…！

男が、引き抜いた槍の切っ先を、もう一人に向けた。

駄目だ。

あの子を殺しては駄目だ。

そう思った瞬間、私の足は自然と動いていた。

私の唯一の取り柄。足の速さ。

間に合え…！そう祈りながら、思い切り地面を蹴った。
振り下ろされる槍を目で追って。

すぐ後に、ずぶっ、という嫌な音がした。
「？」
私は男たちから数十メートル離れた位置で、子供二人を抱えて身を低くしていた。
地面に深々と。沈むように刺さっている槍を見て、背筋に何かが走った気がした。

私は、一秒で５０メートルを走りきる様な奴じゃあ…なかったんだけど。
靴下のままで、ここまで走れるとは思わなかった。

というか明らかに異常だ。

まぁ、今は都合がいい。
「お…ねえちゃ…」
腕の中の女の子は、泣きながら私を見上げていた。
死んでしまった女の子は、すごく軽くて。ニンギョウみたいで。
でも、すごく重かった。抱えてるのが、精一杯なくらいに。

今まで地面に刺さった槍を呆然と見つめていた男たちは、女の子の声で一斉にこちらをみた。
「…まじ…信じらんねえなぁ…！逃げたらほっぺつねんないと…っ！」
私は小さくそう言って、男たちとは逆方向に、二人を抱えたまま走りだした。

03　蒼の少女

走って。

何キロも走ってきた気がする。
さっきまで追って来ていた男たちももういない。
子供とはいえ、霊長目ヒト科…正式な名前は忘れたけど人間を抱えているのだ。しかも二人。

しかし。
何故だか、まだまだ走れる気さえする。
いや…かなり疲れている上に、息も乱れているんだけど。
足は軽い。不思議。

まぁしかし追手もいないのに走ってもしょうがない。
私は立ち止まって、周りを見回した。
いつの間にか日が出始めていて、空を見上げるとうっすらと空に文字っぽいものや数字が浮かんでいた。
なんだこれ…。なんだここ…。

今更な疑問がぽつぽつと浮いてくる。

視線を自分の体の周りに一周させる。付き添いで首と上半身も同行。
周りはさっきの更地とは違って、草花や木が茂っている場所だった。
綺麗な空気に不足はなさそうだ。

周りの安全を確かめて、私は木陰に二人をおろした。そして傍に座

る。
疲れていたのか、眠っていたらしい少女は、すぐに目を覚ました。
芯を入れた後に勢いよく元に戻るホッチキスのように上体を起こす少女に、声をかける。
「た…ぶん、もう大丈夫じゃないかな。まあ…」
私は少女の頭を撫でて。
「本当は大丈夫なんて、言えないけど…ね。」
永遠の眠りについた少女を見下ろす。胸が痛い。二人とも、７・８才くらいの幼い女の子だ。

「…ありがとう、お姉ちゃん。」
少女は、姉妹か友達かは知らないけれど、静かに眠る女の子を見ながらそっと言った。
うーん…。
「あのさ、名前…聴いて良いかな。」
呼ぶときに困るからね。
「あ…。うん。ソラリス…です。」
明るい場所で見てみると、すごく可愛い子だ。髪と同じ蒼い瞳が、光を受け止めて、増幅させながら放出しているようだった。
「ソラリス…ふうん。で、この子は？」
私は同じく蒼い髪の眠り姫を撫でる。首から広がっていた赤は、もう外出を止めている。可愛い子だ。
「く…！クルネル…！」
ソラリスは、身を乗り出すようにして言った。
「友達…！ともだち…、うぅ…クルネルぅ…。」
ソラリスは、瞳から透き通った涙で頬に軌跡を作り始める。
そうか、友達か。辛いなぁ。

私はソラリスの頭をぽふぽふと撫でて、ソラリスが泣きやむのを

待った。

しばらくして顔をあげたソラリスに罪悪感を少し芽吹かせながらも、訊いてみた。

「さっきの人たちは…何かな？」

ソラリスは、美しい瞳で私を見て、俯いた。

「多分…【紅い狐（フォックス）】の人…だと思います。」

自信なさそうに、ソラリスは言った。

「紅い狐（フォックス）…？」

私が首を傾げると、ソラリスは目を見開いた。ああ、常識なのね。

でも仕方ないじゃない。ここがどこかも分からないのよー、私は。

「知らないん…ですか？

そういえば…お姉ちゃんはどこの所属なんですか？」

ソラリスは眉をひそめて、わずかに警戒の色を見せる。うわぁお。

「所属？」

陸上部だけど…それは違うよね、勿論。

「あの…お姉ちゃんどこから…」

ソラリスが私の故郷は何処かと訪ねて来たところに。

「ソラリス！」

走って来たのは、結構なイケメン二人組だった。

ソラリスよりも少し深めの蒼色の短髪の青年と、金髪に蒼い瞳を持

った渋い男性。男性の方は、茶色い馬にまたがっている。
青年はソラリスに転げるように駆け寄って、小さな矮躯をチカラいっぱい抱きしめた。

「ジャック…！」

ソラリスは嬉しそうにジャックなる青年を抱き返す。ソラリスの知り合いのようでとりあえず一安心。
自分でもわかっていない現状を説明する人が増えちゃったけど。まぁいっか。

今気づいたけど、靴下きたなっ。

０４　兄妹と

予想はしていたけれど。

青年ジャックと、男性ヴァシュカには、盛大に怪しまれた。
まぁ私はいきなり現れた不審人物だしね。

知っているはずのことを知らなくて、所属とやらもしてなくて。
クルネルを抱いていたせいで制服は血だらけで。そのクルネルは…
命を絶っていて。
怪しむな、という方が無理だろうな。自分でもそう思うよ。靴下だし。

私はソラリスの協力を得て、今の現状を私の分かる範囲でジャックとヴァシュカに伝えた。
ジャックとヴァシュカは真面目に聴いてくれて、ソラリスは目をキラキラ輝かせて聴いていた。不思議な体験をした私の話しが聴けるのが楽しいらしい。

私が別の世界から来たという話を聞いた二人は眉を思い切りひそめ（私も同じ気持ちなんだから変人を見る目で見ないで下さい）、ソラリスとクルネルが襲われていたとこを目撃したところを話すと、二人は悲しそうに目を細めた。語っているこっちが苦しくなる。

私のつたない説明で、今までのことを語りきると、ジャックがいきなり跪いて手を取ってきた。うい？！
「本当にありがとう。ソラリスと、クルネルを助けてくれて。」

目を強く閉じて、ジャックはそう言ってきた。
「く…クルネルは…助けてあげられなかった…。」
私はずきりと痛む何かから目を逸らすように、俯いた。そんな私に、ジャックは静かに首を横に振る。
「いや。助けてくれたよ。クルネルは、ここにいる。ソラリスと一緒に、帰って来てくれた。」
ジャックはそっと微笑んだ。儚い笑みを浮かべる美青年に、思わず見とれてしまいそうだった。

「少し信じがたいが、別世界から来たのなら…きみのこともいろいろと納得がいく。」
ジャックは私の話しを信じてくれたらしい。へえ、すごいな。
それから、何かと分からないことも多いだろうから、この世界のことを教えてあげるよ。と言われた。
優しいね。

「じゃ、ここじゃあれだし…一緒に行こうか。ええと…」
「ああ、私は七夕…みんななゆって呼ぶから。なゆで良いよ。」
「そうか。じゃあナユ。とりあえず僕らの家にしばらくいると良いよ。」
ジャックが微笑んで言った。

え？私しばらくいるの前提？

「そうだよ、おねえちゃん！ウチにきなよ！ずっといても良いよ！」
ソラリスもにっこり笑って言う。このそろって強引な感じは…。
「“僕らの”って…兄妹…？」
私の問いに、二人は同時に頷いた。ふうん。美男美女だなぁ。
いや、それは関係ないか。

私は汚れた靴下を脱ぎ捨て、そして立ち上がった。体力も大分回復したしねえ。
クルネルをそっと、大事に抱きかかえて「よろしく。」頭を下げた。
もう少しで、帰れるからね。私はクルネルに心の中でささやいた。
それじゃあ、この世界の話をいろいろ知るために、お世話になりに行きますか。

05　異世界

ソラリスとジャックは、別ルートで帰るそうで、私と馬はそこを通って行くことができないらしい。
なので、私はヴァシュカと一緒に馬に乗って連れていってもらうことになった。

「ごめんね、わざわざ。遠回りなんでしょう？」
私は、クルネルを揺らさないようにそっと抱えて馬に跨りながら、ヴァシュカにお礼を言った。ヴァシュカは小さく笑って、首を横に振る。
「だから、こいつもあの道は通れないんだ。俺がついてなければ。」
ぽんぽんと馬の背を叩きながらヴァシュカは微笑む。
「あ、そっか。」
しかしやっぱり、ヴァシュカもかっこいいなぁ。笑うと大人の色気みたいなのを感じる。
ヴァシュカはもう一度優しく笑って、私を気遣いながら馬に跨った。

ヴァシュカは私に気遣ってくれているのか、馬のスピードをゆるやかにしてくれている。
馬、馬って言ってるけども、この馬名前はないのか？
と、思ったので聴いてみた。

「ああ、こいつはロッティだ。」
ヴァシュカは、馬のたてがみをなでながら答える。ずいぶんと可愛らしい名前だね。
上あごと下あごを別々に動かして「あん？ナニ見てんだてめー。やんのかこら。ちんちくりんのくせにご主人を誘惑しやがってヒヒー

ン」とか言ってるように、横目でにらんでくる。
あれ、馬ってこんなだったっけ？

ジャックとソラリスの家に着くまでに、ヴァシュカがこの世界のことを少し教えてくれた。

分かったことは。
ここはジェルズドリアという名の世界で（世界に名前があるってどういうこと？）、５つの国で出来ている。

通称青の国と呼ばれているセノルーン。
同じく緑の国と呼ばれているラッシュバルド。
そして赤の国と呼ばれるフレイムルアー。
さらに、銀の国と呼ばれるログダリア。
最後に、この世界の中心に位置する、白の国と呼ばれるライトフェザー。

「あお…みどり…あか…ぎん…しろ。」
「ああ。俺達はセノルーン公国の者だ。」
「…そんな気がしてた。…ヴァシュカの目とか…ジャックとソラリスの髪とかも、関係あるんだよね？」
私の説明に、頷くヴァシュカ。
「そうだな。そういう場合が多い。」
多いということは、必ずしもという訳ではないということか。
「まぁ、国内での結婚だけではないからな。たとえば赤と青の子供は、そのどちらかの色を引き継ぐか…紺や紫になることもある。」
うわ、絵の具みたい。
色を混ぜて新しい色を作るみたいな。
「ああ、でも…。白の国は少し違うんだ。」
ヴァシュカの言葉に、疑問を返す。何が？

「白の国の者は殆どが同族同士の婚約なんだ。まあ、例外がないわけではないが…。白の国の者は、天使だからな。天使は天使同士で結ばれるのが当たり前なんだ。」
「てんしぃ？！」
なんてメルヘンな。
死人を天国に運んだりする全裸の羽つけた子供みたいなやつなのか？
「馬鹿を言うな。そんな優しいものじゃない。子供というのはあっているが…。天使は俺達を殺しに来る、生きた殺戮兵器だぞ。」
「はぁ！？何それ！」
殺戮兵器？“天使”が？
「まぁその説明はおいおいして行こう。」
ヴァシュカは難しそうな顔をこちらに向けて、そう言った。
一般常識であることを教えるのは疲れそうだ。
私だってテレビの仕組みや電車の使い方を教えろと言われたら面倒だと思うだろう。
そもそもテレビの仕組みなんかは私だってよく分からないし。
そういうことを考えると、ヴァシュカもジャックも、もちろんソラリスも。
得体のしれない私にいろいろ教えてくれて。
それだけでもう、信頼できるというものだ。

ヴァシュカとの会話が切れたところで、街が見えてきた。
そこそこ大きい街で、人々がにぎわっている。
ヴァシュカは一度ロッティを止まらせて、羽織っていたマントを渡してきた。
「すまないが、お前のその髪の色は危ない。俺達が他の者達に事情を説明するまでは正体を隠していてほしい。」
その言い方がすごく優しくて、なんだかお父さんを思い出してしまった。

ヴァシュカの方が若いしかっこいいけど。
私はわかった、とうなずいてマントをすっぽり頭からかぶって、一緒にクルネルを包み込む。
もうすぐこの子の故郷につくのかと思うと、どこか申し訳なく、そしてどこか嬉しくなった。

音がさっきよりも籠るマントの中で、耳を澄ませる。
人々のざわめきやロッティの蹄の音の中に、ヴァシュカへの挨拶が多く紛れていた。
ヴァシュカはどうやらこの街では有名らしい。
ちらりと周りを窺うと、ほとんどの人は髪が青かった。
おおう。神秘的。

私は少しの好奇心と、少しの不安を携えて、ジャックとソラリスの家へと連れられて行く。

０５　異世界（後書き）

国名とかはすごく適当なんで、なんだそれ（笑）とか思える名前があってもあえてスルーでお願いします！

06　魔法

ソラリスとジャックの家は、街から少しだけ離れた村だった。
小さいけれど、可愛らしい形の木造建築。

ヴァシュカがその家の前にロッティを止まらせた途端に、蹄の音に気付いたのか、赤いドアからソラリスが勢いよく出てきた。
「おねえちゃん！いらっしゃい！」
蒼い少女は、白い頬をほんのり薄紅色に染めて微笑む。わあ可愛い。

私はマントをずらして、ヴァシュカに手伝ってもらいながら降りる。
「クルネルを。」
ヴァシュカに言われて、私は抱えていたクルネルを丁寧にマントで包んで、そっと渡した。
ヴァシュカも同じように丁寧に受け取って、優しく抱きしめた。
「じゃあまた来る。」
ヴァシュカはそう言って微笑むと、「けっ。もっとあたしに感謝しなよ小娘が。ヒヒーン」とか思っていそうな目を向けてきたロッティと共に歩み去って行った。なんだあの馬は。

少しさみしそうにその背中を見送っていたソラリスは、しばらくしてから、私の手をとった。
「じゃ、おねえちゃん入って！」
にっこりと微笑むソラリスに笑顔を返して、手を引かれていった。

家の中も綺麗で、可愛い。
初めて見る暖炉に、赤い光と透けるような陽炎を揺らしている。

「お？」
横の扉からひょっこりと、ジャックが顔を出した。
「着いたのか。疲れたんじゃない？すわりなよ。」
ジャックはにこ、と微笑んで部屋の中央にあるテーブルとおそろいの椅子を勧めてきた。
お言葉に甘えて座る。
「今昼食作ってるから、待ってて。」
そう言ってジャックは暖炉でいろいろいじくったり、扉を出て何か忙しそうにしていた。
どこか申し訳なさを感じながら、隣に座るソラリスに目を向けた。

「おねえちゃん、服…。」
ソラリスが私を見て言う。あ、そうだった。どうしようか。
「待ってね。下手っぴだけど…わたしがやったげる。」
ソラリスはにっこりと微笑む。やる？何を。

ソラリスは私の胸のあたりに手を当てて、何か聞き取れない程小さな声で呟いた。
すると、私の服についていた赤色や泥などの汚れが腹や背を伝って胸に集まってくる。うぞうぞと。
はっきり言ってすごい気持ち悪い。
うぞうぞ集まったやつはソラリスが手を引くとそれについて浮き上がっていく。
「おお！」
すげえ。なんだこれ！
すぅう、っと浮き上がった汚れたちは、くるくるっと丸まって小さな球形に収まった。
「え？何、今の？」

私は、球を暖炉に投げ入れて、じゅわじゅわと音をたてて歪む炎を見ながら訊いた。
あんなものは見たことがない。
少なくともウチの人は皆できないことは確かだ。面倒臭くても洗濯機を使う。
ソラリスはきょとんとして、
「お姉ちゃんの世界にはなかったの？魔法…。」
そんなことを言ってきた。
ある訳がないでしょう…。小さい頃はそりゃ夢見ましたけど。
最近は寝てる間に放り出してしまったらしいケータイのアラームを布団から出ないでとめられないものかと考える際の手段の候補として上がったくらいだ。
夢ないとか言うな。二度寝の心地よさはあれだぞ…。うん。あれだ。良いぞ。…ああもう、国語力！

閑話休題。
ソラリスは誇るような笑みを浮かべた。うわ、若干ムカつく。
「わたしたちはね、まほー使えるんだよう。」
へぇ…。すごいな。それは。いや、まじで。
ソラリスの話しによると、生活しやすいように工夫された魔法とか魔法具を使えるだけで、私が思い浮かべるような空を飛んだり、人の気持ちを読んだり、炎を操ったりするのは一般の人間には出来ないらしい。

「その言い方だと、使える人もいるの？」
「うん。いっぱい魔力を持ってる人はね。普通はそんなに魔力を持ったりできないから、ほんの一部。
それに長い詠唱を覚えなきゃいけなかったり、複雑な魔方陣を作らなきゃいけなかったりするからすごくめんどくさいんだよ。
大きな魔法ほど失敗したときの代償は大きいの。

身体の一部が失くなってしまったりね。」
ソラリスは自分がモノを教えるというのが嬉しいのか楽しいのか、誇らしげな顔はそのままで話す。
しかしそんなところも可愛いと思うのだから、私は意外とロリコンなのかもしれない。あー、カミナに会いたい…。

「身体の一部って…。」
「それでも、魔法を使いたがる人は多いんだよね。
……こんな世界だし。」
ソラリスは綺麗な蒼の瞳に影を落とす。
…なんとなく、分かる。つまり、クルネルが殺されたことに関係してくるのだろう。

「でもね、詠唱も魔方陣もなしに魔法を使える人もいるんだ。わたしは王子さましか知らないけど、魔力が異常に高かったり、精霊と契約したり、魔法の高度な研究をした人とかは。」
「王子さま？」
ソラリスの話しは何がすごいのかイマイチわからないけれど、それ以上に気になるワードが。

日本でいうと皇太子さまか？王子って。
なんか日本は王とか王子とかそういうのにあんまり馴染みないからなぁ。
「うん、王子さま！セノルーン公国の王子さまは優秀な魔法使いでもあるんだよ！かっこいいし。」
ソラリスが瞳を輝かせて語る。
可愛いなぁ。
しかし、ちっちゃい子が語るイケメンな王子って、すごい童話に出てくるようなＴＨＥ・王子って感じなのだろうか。それは見てみたいなぁ。“本物の”王子というのも興味あるし。

どうでもいいけどＴＨＥ・王子ってＴＨＥってついてるのにあんまり映画のタイトルっぽくない。

「あ…でも。例外はあるか…。」

その声に、私は意識をソラリスに戻す。

「天使さまと、女神さま…。」

「天使…に、女神？」

天使はさっきヴァシュカの話しの中に出てきたけど。殺戮兵器とかなんとか…。しかし、女神とは？

「天使さまと女神さまはね、〈空間転移（テレポート）〉とかが、詠唱も魔方陣もなしに使えるんだ。」

それは…すごいことなんだろうな、きっと。よくわからんけど。

「その天使とやらは…。」

言いかけたところで、ジャックが昼食を携えてやって来た。

そこで丁度私のお腹が切ない鳴き声を上げた。そうか、気付かなかったけど意外と時間経ってるんだな。

質問は後にするか。そう考えて、料理が置かれた机に身体を向けた。

07　疑い

お昼は、ミートパイとコンソメスープだった。多分。
少なくとも味はそうだった。
作り方とかは分からないからなんとも言えないけれど、食べ物に関してはあまり心配はいらないみたいだ。

しかもかなり美味しい。
「すっごい美味しい…。ジャック天才じゃない？」
「いや、そこまで褒められると照れるよ。」
柔和な笑みを浮かべてありがとう、と言うジャックはやっぱりカッコよかった。

「しっかし…ほんと綺麗だね。どういう原理なのか全然わかんない。」
「「何が？」」
ソラリスとジャックが揃って訊き返す。
「髪だよ。目もだけど、目が蒼い人は見たことあるしなぁ。」
今はカラコンとかで変えられるしね。
でも髪は違うじゃん。
なんか違うじゃん。染めても“染めてる”感があるじゃん。
二人はそれとは違う。
鮮やかで、柔らかそうで、地毛っていうのがちゃんと分かる。

「へぇ。髪色が珍しいなんて言ったら、ナユの方がよっぽど珍しいけどね？」
ジャックの言葉にソラリスがこくこくと頷く。
「黒い髪なんて初めてみた。」

ソラリスは興味深そうに見つめてくる。ちょ、みられんの恥ずかしいやめて。
「黒い眼も初めて見る…。」
今度はジャックが正面から見つめてくる。横から前から見られてたじたじですよ、わたしゃあ。

「ひゃあっ！？」
何をするか！
いきなり髪を分けて私の首元を見るソラリス。
「【一角獣（ユニコーン）】じゃない…。」
「ちょ…。」
次は右腕の袖をまくられる。え、何なに？！
ジャックに目を向けると、真剣な目でその様子を見ている。え…ええぇ…？
「【紅の狐（フォックス）】でもない。【青龍（ドラゴン）】でも…いったぁ！？」
いきなりスカートをめくってきやがったソラリスの頭を思いっきりはたく。
「な、何すんのおねえちゃん！」
「お前が何するかー！」
くそう…家に帰ってすぐさま脱いでしまったジャージが恋しい！

ジャックを見ると赤い顔を手で覆って目を逸らしていた。うわ…あいつぜってぇ見たろ…。
くそう、春め…！あんな中途半端なあったかさじゃなければ、スパッツにするかそのままジャージ着用でいるかどちらかにしたのに…！

「じゃあちょっと胸見してよ、おねえちゃん。」
「何でだよ！？」
「敵かどうか確認してるの！信じてるけど、でも一応！」
「えええぇ～…。」

そんな私の声は無視して、ソラリスは襟を軽く引っ張る。
「【銀狼(ウルフ)】でもない…と。」
ソラリスちゃん、こんな性格でしたっけ…？

「【漆黒(レイヴン)の鴉】ではないでしょう。食事してたし…。」
「うん！まぎれもない無所属！」
ソラリスはにこやかに笑うと、椅子に座り直す。
ごめんね！ってそんなにこやかにに言われましても…。私としては何をされたのか全然分かんないんですけど。

「あー…。この世界ではね、昔から戦争が続いてて。その戦争が起こってからは世界の人間たちは5つのグループというか…組織…っていうか。まぁ別れたんだ。」
ジャックは私と目を合わせないまま話す。そこまで純粋な反応を見せられると私まで恥ずかしくなってくる。

…ふうん？それで。
「それがね、国民の中でも所属がバラバラになってしまって、誰がどこの所属の者かが分からなくなってしまったんだ。」
「？　つまり、同じ国の人でも敵がいる状況になってしまった、と？」
「そう。だから、見分けがつくように“印(しるし)”をつけた。
【一角獣(ユニコーン)】は首の後ろに角の生えた馬が描かれた蒼い陣を。
【紅の狐(フォックス)】は右腕に九尾の化け狐が描かれた紅い陣を。
【青龍(ドラゴン)】は左の…太ももに、龍が描かれた碧(みどり)の陣を。
【銀狼(ウルフ)】は左胸に大きな狼が描かれた白銀の陣を。
【漆黒(レイヴン)の鴉】は舌に羽を拡げた鴉が描かれた黒い陣を。
今、ソラリスはそれが無いかを確認していたんだ。」

なるほど。そういうことか。

「無所属の者はほとんどいないよ。身の危険を守ってくれる人もいないし、“狩り”で力を貸してくれる人もいないからね。
まあ、【漆黒の鴉（レイヴン）】は無所属みたいなものだけど。」
そこはよくわからない。
と、いうか。“狩り”？嫌な響きだな。
「じゃあ二人も何か入ってるの？」

私の話しに一瞬迷ったらしいジャックは、逸らしていた瞳を私に向けた。
それからふっ、と笑って。
「疑心暗鬼になるのはよくないね。ソラリスの命の恩人を疑う訳にはいかない。」
言って、こっくり頷いた。疑われていたのか。
「僕とソラリスは【一角獣（ユニコーン）】だよ。ソラリスの首の後ろを見てごらん。」
言われて、ソラリスは髪をあげて後ろを向いた。
「うわ、本当だ。」
ソラリスの首には、小さくて丸いごちゃごちゃした蒼い絵みたいなのが書かれていた。しかし。
ユニコーン…？
小さくてよく見えないので、ユニコーンが書かれているかどうかなんてわからない。

どういう仕組みになっているのかと、陣に触れてみると。
いきなり陣が浮いて、お盆くらいの大きさに膨張した。
「え！？」
驚いていると、ジャックがいきなり立ち上がった。
「異世界の人にも…魔力はあるんだな。
魔方陣は、魔力を持っている者が触れると膨らむんだ。
魔力を持っていない者なんて聞いたことがないから、不思議ではな

いんだけど…。」
え。私魔力持ってんの？

膨らんだ魔方陣にはしっかりユニコーンが存在していて。
くすぐったいらしいソラリスの笑い声が響く中、私は新事実を発見してしまった。

全然現状に追いつけていない私は、馬鹿なのだろうか。
馬鹿なんだろうね。

08　昼寝

ご飯を食べ終わった後に、長ったらしい説明は疲れるから、と我ながらわがままな理由でいったん話を打ち切った。
ジャックも「確かにね。」と同意してくれて、寝床に案内してくれた。
というかベットは二つしかないらしいので、ソラリスのベットにお邪魔になる。
よく考えてみたら、夜中…というか時間のたち方からして明け方あたりから寝ていないのだ。
いや、それより私は昨日（？）の朝起きて学校に行ってから寝ていないじゃないか！
全速力でけっこう走ったしけっこう疲れてたんだな。

寝ようと思った瞬間なんだか緊張の糸が切れたみたいに、いきなり疲れが体を襲ってきた。
ぐったりしているのが自分でよく分かる。
ぐにょんぐにょんしてそうだ、私。

同じく疲れがたまっているらしいソラリスと一緒にベットに沈み込む。
ソラリスも子供だしな。
私はソラリスの頭をぽふぽふと数度撫でると、すぐに睡魔に意識をもっていかれた。

―　一日目終了　―

目を覚ましたのは、もう真夜中だった。
そこまで寝るつもりはなかったので驚いた。
横にいたソラリスは寝る前と服が違うから、一回起きて着替えたのだろう。

私は、起きて水を貰おうと台所へ向かった。
すると台所には明かりがついていて、覗くとジャックがごそごそと身支度をしていた。
声をかけようか少し躊躇ったところで、「あれ？」先に気付かれた。
「起きたんだ。ぐっすり寝てたから、疲れてたのかなって思って起こさなかったんだけど…お腹すいたかな？」
にっこりと微笑んで言うジャックは、動きやすそうな服を着ていて、腰には短剣が刺さっていた。

「んーん。別にすいてない。なんか時間が経った気さえしない…寝て起きたら夜、みたいな。」
「はは。」
「…どこか行くの？」
私の質問に、ジャックはこっくりとうなずいた。
「ちょっとお仕事にね。」
「仕事ぉ？」

どうにもジャックは、【一角獣（ユニコーン）】の戦闘部隊とやらの隊員であるらしく、夜中は警備などの仕事があるらしい。
「外には出ないでね。迷うよ。」
そこまで広い村じゃなかったけど…。
「そうじゃなくて。ここは、さっきの場所と違うから。」
「意味わかんない。」
「だろうね。僕もナユの立場だったら意味わかんないなって思った

よ。多分。」
ジャックは苦笑して、どういうことか教えてくれた。
なんでも、戦争は夜にしか行われないらしく、夜になると村や町が位置の座標を変えるらしい。
意味は何となくしかわかんないけど、なんとなくわかれば充分。
ようするに夜になるとここはセノルーンじゃない“どこか”になるわけだ。
ジャックの話しだと、同族同士で殺し合いにならないように、だそうだ。
だから今、周りには【一角獣（ユニコーン）】の人間しかいないらしい。

「どこ行くのぉ…。」
欠伸を噛み殺しながら尋ねると、ジャックは図書館だよ、と言った。
図書館？
「カモフラージュというか…作戦本部とか諸々がその地下にあってね。」
おお。深い事情っぽいことを話してくれてる。私さっきより信用されてるみたい。
「…行ってみたい。」
「ええ？！」
だって、なんかヒントがあるかもしれないし。元の世界に戻るための。

というか、
「まあ結果は大体予想ついてるんだけど、私が元の世界に戻る方法って…。」
一応ね。一応聞いてみようと思って。
ジャックは私の言葉に気まずそうに俯いて、首を横に振った。「僕には分からないね…。」

優しいねえ。
「いいって。分かってたし。これから探すし。…そのためにも。」
私はゆるーく笑って。
「協力すると思って。連れてってぇさ。」
さて、じゃあ。優しさにつけこんでやろうじゃないか。
私の“お願い”に、人のいいジャックは思っていた通りかなり渋々だったけど受け入れてくれた。

さて、味方の情報を流したとかでジャックが嫌な目に合わないような自己紹介を考えなくてはねぇ。

09　『玉』（前書き）

この話には残酷表現が含まれています。
苦手な方はご注意ください。

09 『玉』

図書館とやらは思ってたより大きかった。
もしかしたら東京ドームよりもでかい。
すご…。
感動している私に、ジャックはここは世界一大きい図書館なんだよ、と補足してくれる。

しかし、周りに張られている広告や案内板を見た限りだと、私はこの世界の文字が読めないらしい。
何か調べてみようと思っていたのに、これでは無理そうだ。
ジャックにそう伝えると、「セノルーンの言葉だからかなぁ…。」と少し思案してくれていた。
やっぱり良い人だよなぁ。
「やっぱり本部とやらに…「それは駄目。」
僅かな希望をばっさりと切り捨てられた。

髪は帽子で上手く隠して、私はジャックについて来たんだけど、結局作戦本部に立ち入らせてもらえるような上手い案は考え付かなかった。
まぁ、そもそも好奇心だしね。

「ジャック。」
いきなり名前を呼ばれて肩を跳ねさせるジャックの横で、私は声をかけてきた人物に目をむける。
「ヴァシュカ！」
ヴァシュカはジャックの反応に苦笑して、右手を軽く上げた。
「来たのか。」

「うん。わがまま言って連れてきてもらった。でもねえ。」
私がここの本は字が読めないのだと伝えると、ヴァシュカは手伝いを申し込んできた。
さすがにそれは悪いと思うので、丁寧に断って。
本を一冊読むのはけっこう時間や労力がいるものだ。
それを他人にやらせるのは気が引ける。
とくにヴァシュカのような良い人には。

あー、とヴァシュカは言いにくそうに私にちらりと目線を送って来た。
ん？と私よりも背の高いヴァシュカを見上げる。
「…靴は。」
「ああ、これ？」
私は履いているくるぶしほどのブーツを見下ろす。
「ジャックに借りた。」
「そうか。」
ま、明らかにそれが本題でないのは丸わかりだ。
「何？」
仕方が無いのでこちらからうながしてみる。

「いや。実は言おうと思っていたのだが…。その、ナユが帰る方法が、皆無…という訳ではないんだ。」
私は気まずそうなヴァシュカに、目線で続きを促した。
その感じからしていい方法じゃないことくらいわかるので、気分はあがらない。
「ただ、その方法はあまり薦めない。」
「でしょうね。」
私の軽い受け答えに、ヴァシュカはやや目を見開いた。
「帰りたいんじゃないのか。」
「帰りたいよ？でも、ヴァシュカが薦めない帰り方で帰るのは無理

かな。いい方法じゃないんでしょ？」
ヴァシュカは目頭を緩く下げて、頷く。
信用してくれてるんだな、と小さく呟いて話し始めた。

「この世界での戦争の話しはもう聞いたか？」
「組織に分かれてるとこまでは。」
「何故戦争が起こっているかは。」
そういえば知らない。
「理由のない戦争なんてないもんねえ。」
ヴァシュカは頷いて、蒼い瞳をまっすぐに私にむける。

「『玉』を探しているんだよ。」
「『玉』？」
何それ。美味しそう。
「『玉』ってのは…、その命に力を宿す存在だよ。」
横から、ジャックが説明を入れてくる。
チカラってアバウトな…。って笑うわけにもいかないけど。
「願いを何でも一つ叶えられるんだ。でも、『玉』は“誰”なのか、どこにいるのか分からないんだ。」
「『玉』って人なの？」
「ああ、今現在存在する『玉』は6人とされている。」
今度はヴァシュカが私の質問に答える。
ああ、なんか私が覚えの悪い生徒で、補習の時に先生が二人ついて付きっ切りで教えないと理解してくれない問題児みたい。
「いつ『玉』になるのかもわからなければ、『玉』本人ですら自らが『玉』だということを知らないらしい。」

なるほどね。
「つまり、その『玉』様だったら私を元の世界に戻せるかもしれない、と。」

「まぁ、そうだが…。それには、『玉』の命がいる。」
「…殺さなきゃいけないってこと？」
理解力が追いついてきてしまってる私が嫌だった。
「…そういうことだな。」
ヴァシュカは重々しくうなずいた。

「じゃあ。」
じゃあ。
「クルネルは、『玉』かどうかも分からないのに、確かめるために？私利私欲のために？そんな理由で殺されたわけ？」
私は頬が熱くなっていることに気が付いていた。
怒りが沸々と込み上げてくる。
「信じらんない…！」
「僕達もおなじだ。」
ジャックは低い声で言った。

「憤りを感じている。だから、僕ら【一角獣（ユニコーン）】の人間は戦線から離脱してる。それでも狙ってくる人は多い。僕らの中に『玉』がいる可能性だって大いにありえるからね。」
だから僕ら戦闘部隊がいる。眉根にしわを寄せてくわえてそう言うジャック。憤っていることなど、言葉にしなくてもわかった。
そんな姿を見て、不謹慎にもかっこいいな、と思ってしまった。
「そんな方法で、帰るのは、薦めない。戦争に浸ることになる。」
ヴァシュカは溜息まじりにそう言った。

もちろんだ。
そんな方法で帰れるものか。
人を殺そうものなら、お母さんにぶっ殺される。
「ナユがそう断言できる人で良かった。」
ジャックはしかめていた眉間をゆるめ、微笑む。

「最終的にはもちろん帰るけど。帰るための手段は他を探す。」
私はそう言って、笑顔を返した。
「ここで一生を終えるのも嫌だし、何十年もしてから帰って友達が大人になってるのもいやだけど。
ここには食べ物もあるし、寝床もある。それに、味方がいる。」
私は自分の言葉に、主人公みたいなこと言ってるな、と少しおかしくなった。
今はただ、生きてる。それでいい。
ここまでこれたんだから、帰れるはずだ、と勝手な根拠をつけて。

それに。
「この世界でやることも出来たしね。」
私の言葉に、ジャックとヴァシュカは首を傾げる。

私はこの世界の戦争を、終わらせてやる救世主になろう。

この世界の歴史に刻まれるような、でっかい人間になってやろう。
何にも知らない世界でこんなことを思うのは、きっと無謀なことだけど。
魔法とかが存在するメルヘンな世界だぞ？
漫画みたいなこと思っていいじゃん。

恥はこの世界に置いてっちゃえばいいんだから、今は正義を振りかざしてみよう。
「「力を貸そう。」」
ジャックとヴァシュカは、同時に笑って言った。

イケメンが言うと絵になるよね。
自信つくし。

んじゃあ、すっげー頼りにしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8492x/

黒の少女と観戦日記

2011年11月17日18時41分発行